

人種差別とは何ぞ(二)

令和二年十一月

加藤 淳平

我が初めてアメリカに住みたるは、昭和五十年(西暦一九七五年)にして、齢ひ已に四十を越えてき。勤務地は、ニューヨーク市マンハッタンの國聯本部に近き、日本政府代表部なれど、外国駐在中は交際の便宜のため、でき得る限り、良き住居に住むべしとの外務省のルールあれば、妻と、年齢十四歳の長女以下三人の子女ともども、ニューヨーク市北郊の高級住宅地に、居を定む。

されど我が住居と決めたる町は、WASP(白人アングロサクソン新教徒)が牙城にて、曾て有産ユダヤ人ら、この町に居を求めたるも、町の住民より、不動産購入を認められず、この町より北の地に土地・住居を求め、ユダヤ人町を建設せりと傳へらる。我、斯くWASPが牙城の地に、居を定めたるこそ、當時の我の、アメリカの事情に無知なる儘、盲蛇に怖ぢざる愚かさの、なせる業なりしか。

WASPが牙城なれば、この地の人種差別甚だしきは、言語を絶せり。差別を最も強く感じたるは、十四歳の多感なる時期にありし長女なりき。長女は、若き日の我が如く、差別を忘れ去り得ざりしたためか、生涯のアメリカ嫌ひ、日本中心主義者となりにけり。

町のWASP住民、アメリカの最富裕層に屬する人々にして、周圍に廣き庭園を廻らせたる大邸宅に住み、社交とパーティーに日々を送る。アメリカの現代作家アプダイクに、「カップルズ」なる小説あり。架空の町の、富裕なる住民夫妻ら(カップルズ)の、怠惰にして、退屈なる日々の生活を描く。連日、夫妻ら同士の社交に日を送り、唯一の關心事は、異夫妻間の戀愛遊戯と、不倫の男女關係のみとなる。

こは、わが住みしWASPが牙城の町の日常に、酷似す。我、國聯關係に多忙なれば、町の住民との關係ほぼ無けれど、町の子等と友人となりて、時折、友人が家に招かれし我が子等より聞けば、多數の家の、四五人の子等に、母親異なる者多く、然も母親は、屢々、今は町の他の家の女主人なりとぞ。そは町の住民等、狭き交際範圍の中にて、戀愛遊戲に現を抜かし、離婚と再婚を、繰り返したる結果ならむ。豈「カップルズ」の町に似たりと、言はざるべけんや。

アメリカに於ける我が生活體驗、國聯關係と、この町に於ける生活以外、さして多からず。されど限られたる經驗より、アメリカの人種差別は、フランスの差別と、かなりの相違あるを覺えたり。

フランスの差別が言語と文化、特に前者が中心なるに對し、アメリカの差別は正しく「人種」差別なり。我がアメリカ滞在の初め、已に英語は、會話に不自由なかりしも、外國人の、平生足を踏み入れざる地域に行かば、明からさまなる差別を受く。

されどアメリカの良きところは、社會全般に、知的活動重視乃至知的能力尊重の氣風の、浸透せることなり。フランスにても、知的活動重視の氣風はあれど、自然科学及び數學以外、一部の例外を除き、「知的活動」とは、フランス乃至西ヨーロッパの文化を學び、それを論じ、研究することに外ならず。例外的に、歐米文化以外の文化に關はる活動も、尊重せらるれど、そは、フランス語にて、表現せられたる限りのことなり。「知的能力」とは、フランス語にて表現する能力を言ふ。されば大學に於ける全ての考試は、フランス語の書き方を採點す。

アメリカにては然らず。知的活動は、別に歐米に關するのみに限らず、廣く世界全般、或いは東アジアの文化等の、異文化に關する知識・考察全般に及び重視せられ、知的能力も、特に英語能力に拘泥せず、片言なりとも、話すを聞きて、その内容により、知的能力に優れたる者なるを了解せば、直ちに敬意を表す。

フランス人の、異人種・異文化の人を、人として認め、敬意を表する時、「汝はフランス人が如く、フランス語を話す」と褒むるに對し、同じ場合のアメリカ人の言葉は、ごく簡単に、「You are smart.」なり。我が長女は、アメリカ到着後数月経ち、学校の成績良きを、同クラスの者の知りたる後、それまでの差別は霧消せりと語る。

我が長女、トランプを嫌ふ。トランプの型の白人男子らより、最も理不盡なる差別を受けたるためならむ。本年警官の黒人市民殺害に抗議して、多数の白人市民も参加して發生せるデモに對しても、トランプ、一部暴徒化せる参加者を、非難したるのみなりき。

アメリカのみならず、南北アメリカ大陸に、所謂「マッチョ」男の傳統あり。十六世紀以降、ヨーロッパより、その地に到來せる白人ら、多くは男なりせば、それぞれ先住民の女性數人を獨占支配し、男性性を誇示し、有色人種なる先住民と、女性を蔑視せり。是、「マッチョ」と呼ばれたる氣風にして、南北アメリカ大陸に、斯かる氣風の白人男性多く、トランプ、典型的なる「マッチョ」男なり。

四年前の選挙にてトランプ、學歴に遜色ある白人男性らが、壓倒的支持を受け、アメリカ初めての、女性大統領を目指したるヒラリー・クリントン候補に勝利せり。この時非白人の、有色人アメリカ人票の、トランプに投ぜられたるは、多からざりき。有色人全體の、一割程度を過ぎずと傳へらる。

されど大統領に就任せるトランプ、個人の人種差別的言辭に拘はらず、實際の政策、さして白人中心のならず。今回の選挙にては、有色人選挙民、そを知りたると覺しく、トランプに投ぜられたる非白人票、アフリカ系全體の二割、ヒスパニック系の三割、アジア系アメリカ人の三割なりしと、報道せらる。

今アメリカの報道界、全體投票にて、バイデン候補に及ばざりしと報ず。投票に些かの疑問あるにや、トランプ、報道せらるる開票結果を、受け入れず、法廷闘争に持ち込まんとす。そがトランプが横紙破りなるや、正當なる根據ありや、我、判斷する能はず。

前回トランプに投ぜられ、今回はトランプならで、バイデンに投ぜられたる票、多數を占めたりとせば、そは如何なる票ぞ。アメリカ社会に、今も消滅せざる人種差別に、バイデンの明確に反對し、トランプの、同調するに非ざるも、明確に拒否もせず、微温的態度なるは明らかなり。されど今回は、上に見たるが如く、トランプの得たる非白人票、前回より増えたれば、今回の選挙、人種差別が決定的要因なりしとは、斷じ得ざるべし。

さらば決定的要因たりしは何ぞや。保守的白人中産階級の、女性共和黨支持者等、前回は、民主黨候補ヒラリー・クリントンの、知的エリート臭紛々たる人格を嫌ひて、共和黨候補者たるトランプに投票せるも、今回は、民主黨候補バイデンの、穩健なる中産階級的價值觀を體現せるを、トランプの、人種差別的なるとともに、女性差別的なる「マツチヨ」性より、好感せりと想定し得ざるや。

トランプ、我が安倍前總理が御努力ありて、日米關係にとり、良き大統領なりき。されどトランプが如き、人種差別的、女性差別的アメリカ人、今のアメリカ、即ちアフリカ系市民の、警官による殺害に對する抗議デモに、多數の白人市民の參加するアメリカに、一部の、過去のアメリカ的偏見に、今も拘泥する白人低學歷者を除き、已に適合し得ずなりぬ。我ら日本人、紛れもなき有色東アジア人にして、過去のアメリカにては、差別を受けたる者なれば、近年のアメリカの斯かる動き、喜ばしく、又歓迎すべきことならずや。

(令和二年十一月十日受附)